

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】林 慶俊

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院 総合文化研究科

【研究題目】清帝国の政治構造と支配集団

【研究の目的】(400字程度)

清帝国(1616-1912)は、16世紀末、東北アジアの片隅から勃興した満洲人の国家であり、17-18世紀にかけて勢力を拡大し続け、旧明領の漢地のみならず、モンゴル・東トルキスタン・チベットをはじめとする広大な領域を統合する巨大帝国へと発展した。複数の地域にまたがる清帝国の広域統治は、20世紀初めまで続き、結果的に現在のユーラシア東方世界の住民構成・宗教分布・国境画定さえも規定することとなる。このように、前近代ユーラシアにおける最大・最後の広域帝国であった清の国家構造の根幹をなしているのが、史上著名な「八旗制」である。

本研究では、「八旗制」という軍事・行政組織に所属する人々、つまり「旗人」を清朝の支配集団として捉え、彼らが行なう政治行動が、全体としては如何なる構造の下に秩序づけられているのか、という点を追究することで、清朝の政治構造の実態を明らかにすることを目的とする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

八旗とは、帝国の支配層とその領民からなる組織体系であり、人丁の供出母体であるニルを基本単位として、5~10ニルで1ジャランを、5ジャランで1グサ、すなわち旗を構成するという階層構造をとっていた。各旗には上級皇族たちが旗王として分封され、その旗に所属する旗人と領民を管掌した。皇帝は、鑲黄・正黄・正白からなる上三旗を直接率いる一方、その他の下五旗(正紅・鑲白・鑲紅・正藍・鑲藍)にはそれぞれ封じられた旗王が率いていたのである。すなわち、皇帝は帝国全体を指導する君主であるものの、支配組織の八旗においては上三旗のみを直轄しており、その他の下五旗では、皇帝以外の旗王たちが麾下の旗人と主従関係を取り結び、政治勢力を形成していたのである。

先行研究では、八旗を基盤とする諸勢力間の派閥的闘争か、あるいは旗王権力を掣肘・制圧する皇帝権力の推移が主に注目されてきた。その一方で、八旗という相対的に自立・自律した諸勢力からなる、重層的かつ複合的な清朝国家が、どのようなメカニズムによって統一性のある集合体として機能し得たのかという、国家統合の問題は見逃されがちであった。そこで、本研究では、まず(1)政権の中の諸勢力を調停・仲裁する制度的装置として、行政組織の六部に設けられた啓心郎という官職に着目するとともに、(2)譜代の旗王と対をなす外様の漢人軍閥=三藩勢力を取り上げ、清朝政権がそれらの勢力にどう向き合っていたのか、という二つの論点からこの問題に取り組んだ。

これらの研究計画を遂行するために、本研究では既刊の清側史料(満文・漢文)を精読し、関連記事を徹底的に収集・整理した。そのうえで、未刊行の史料にも目を向け、財団法人東洋文庫(東京)・台湾故宮博物院(台北)・韓国ソウル大学校奎章閣(ソウル)などの史料所蔵機関に赴いて、家譜・碑誌・檔案などの調査を行なった。

【結論・考察】（４００字程度）

まず(1)調停・仲裁の制度的装置としての「啓心郎」について。清の国政運営は、行政機関としての六部各部に旗王たちが長官としてつき、関連事務の処理を行っていた。「啓心郎」は、これら旗王が皇帝自身の意に背かないように、両者の間に立って見解の相違を調整する、取次のような役割を果たしていた。次に(2)三藩勢力との比較検討について。従来、三藩勢力については、いわば地方政権のような清朝国家を阻害する存在として見られがちであった。しかし本研究では、その編入過程と内部構造の分析を行ない、清朝政権が彼らをあえて解体せずに温存することで、帝国の藩屏として位置づけていたことを明らかにした。このような考察結果から、清朝国家の政治過程は、単なる諸勢力間の抗争や、あるいは皇帝権力の確立過程としてのみ捉えるのは不適切であり、清朝とは、国家全体を有機的に統合する制度的装置によって支えられた国家であったという、従来の研究とは異なる、新しい歴史像を提示することができた。